中国・日本の婚礼茶俗と文化コミュニケーション

吉　村　　亨

はじめに

人生の通過儀礼や歳時といったライフサイクルにおける茶の習俗(茶俗)のなかで，もっとも多くの事例を検出できるのが，婚姻儀礼(婚礼)に関するものである。

中国も日本も，婚姻は幾段階もの儀礼を経て確定するが，本稿の意図や目的は，そうした一連の婚姻儀礼の節目ごとに登場する茶がどのように用いられ如何なる意味をもっているのか，その具体的な事例を検討・分析することにより，茶の本源的な姿や社会的認識あるいは文化的機能の一端を明らかにしようとするところにあり，それは「茶道(茶の湯)」研究からは見えてこない，もうひとつの茶文化世界に属するものである。

いうまでもなく茶文化の原郷は中国にあり，したがって，こうした研究を行う上で，中国全土わたる茶俗事象の検出が最も基礎的な作業となる。これについては，丁世良・趙放主編『中国地方志民俗資料匯編』全 6 巻(以下,『中国地方志』と略記)から抽出した事例を地域(巻)ごとに「中国茶俗ノート」(Ⅰ)～(Ⅳ)と副題して既に公刊している(1)。

ついで研究対象としたのが日本の茶俗事例である。全国域にわたるこの検出については，文化庁編『日本民俗地図』〈解説・資料〉(財団法人国土地理協会発行。以下,『日本民俗地図』と略記(2))および各市町村史類の民俗編などがベースとなり(3)，一方で，中・近世史料に遡った事例確認の作業も必要となってくる(4)。

ライフサイクルにおける茶の習俗については，既に幾つかの研究を重ねており[5]，直近では「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」と題する論稿を公にした[6]。産育・葬礼茶俗の検証から明らかにし得たのは，産穢や死穢に深くかかわった茶が本源的にもつ清浄性ゆえのキヨメ機能であり，また，祖霊祭祀等にともなって発現される境界性，言い換えれば此岸と彼岸を疎通し得る媒体としての供茶および飲茶という行為の意味であった[7]。

喫茶(飲茶)の風俗が日本に伝わって以来，茶に寄り合う人びとによって，豊かな文化世界が形成されてきたが，そうしたなかで，庶民世界のライフサイクルにおける多彩で多様な「茶俗」の実態は，「茶の湯」や「茶道」という，いわゆる「日本」の「伝統文化」という光の影に隠れた見えない存在として，ほとんど研究の対象とされることがなかった。そうした現状に立って，本稿では前稿の産育・葬送に引き続き，婚礼茶俗の中国と日本の事例を紹介し，その若干の比較を行うとともに，この世界に見出すことのできる茶の文化的な役割とか社会的な意味・機能の一端を明らかにしたい。

1. 中国の婚礼と茶俗

中国で婚礼に茶が用いられはじめたのはいつ頃からなのか，宋代の『東京夢華録』で商家の事例が確認できるものの，その歴史的淵源については未だ明らかにできていない。そうしたなかで，明・清・近代に属するものとはいえ，中国の婚礼茶俗についても，当該の『中国地方志』から全域にわたって多くの事例が検出できている[8]。

婚礼，とりわけ嫁入り婚に関していえば，この一連の婚姻儀礼については，日本と名称こそ異なれ，⑴「式前」の見合い(合意)から婚約・結納，⑵「式当日」の嫁迎えから婚家入り，両親への挨拶や祖霊に対する礼拝，集まった親族や友人に対する披露の宴と終了後の祝事，そして，⑶「式後」の贈答や振舞いなど，各段階に準じて展開する内容はほぼ同様である。

以下では，『中国地方志』から抽出してまとめた「中国茶俗ノート」（Ⅰ）～(Ⅳ)のデータに依拠し[9]，それぞれの段階ごとの主だった茶俗事例を紹介して日本との同異を考える資料としたい。

⑴ 式前の茶俗

結婚に至る前段階として，見合い(求婚・合意)・婚約・結納などという過程があるが，その呼称は地域によって様々である。河北省唐山地区灤県では，男方の家が赤い書簡に求婚の意を書き，飾り物や鶏・アヒル・茶・酒と一緒に女性方の家に贈品を担いで行くことを「過啓礼」と称している。陝西省咸陽地区乾州の場合は，初めての縁談には「庚帖」という書面(日本で言う「釣書」のようなもの)は用いず，訪ねてきた仲人を茶でもてなすことで結婚に同意した意を表したという。日本でも，見合いの場で出された茶を飲むか残すかで婚約を決める「見合い茶」の風習が各地に数多く残されている。

婚約の成立とそれに伴う贈答を「定婚」「定聘」あるいは「下茶」「下小茶」などと称する地域は多い[10]。浙江省衢県では，縁談は男性方がまず酒を用意して仲人を招くことから始まるが，その時には必ず主だった親族や親友が集まって酒を酌み交わし，飲み終わったら，女性方の家を訪れて結婚の意志を申し入れ「留茶」をしたという。婚約の証として，塩12両を紅紙で包んだもの，茶１包を紅と青の麻糸で結んだもの，それに銀１銭２分，以上の３点を女性方に贈り，生年の月日を婚日とするという風習が，広東省『連陽八排風土記』清康熙47年(1708)刻本に見えている。18世紀初頭という早期の事例として興味深い。なお，湖南省慈利県では婚約が定まった年末の礼物を「年茶」と言った。茶の贈答があった名残だろうか。

「下茶」「下大茶」が，納徴(結納)品を女方の家に送ることを意味する言葉として使われている地域もあり，ほかに「小茶」「大茶」「行茶」あるいは「送茶」「過茶」と称するところも多く[11]，この聘礼に対する返礼など，茶は結納の贈答品としてしばしば用いられている[12]。雲南省鎮雄県の回族で

は，女性が婚約に同意すれば，男方の家が，その女性の両親に対して羊・茶・米に加えて養育の恩に感謝する意味の金銭「謝親銭」を贈ることを聘礼としたという。他地域の回族でも結納品に茶を用いる例は多いが[13]，貴州省興仁県では，漢礼でいう結納(「納聘」「納吉」)にともなう茶の贈答礼を「落一」と称している。なお，華北域の内蒙古自治区帰綏県の満族では，「過礼」という「下茶」の儀礼は婚日の2日前に行うが，実際に茶が用いられた形跡は無く，これも贈物や酒でもてなす「下茶」という儀礼名だけが残ったものかもしれない。

⑵ 式当日の茶俗

結婚式の当日は，新郎方による新婦迎えに始まり，婚家入りして両親や親族に挨拶し祖霊を礼拝，そして披露宴と宴後の様々な祝い事に至る。

日本で言う嫁迎えを中国では「親迎」と言うことが多く，日本に比べて盛大に行われた。河北省保定地区の望都県では，迎えに来た新郎を室内に迎え座らせて茶を献じる。新郎が出された茶を飲んだことを確認して初めて付添人が新婦方の家主の登場を促すといい，安徽省桐城県では，こうした「献茶」が三回も行なわれている。台湾省澎湖県でも，親族に家の中へ案内された新郎には先ず「茶湯」，それから湯丸・点心が勧められるが，宜蘭県のように，茶湯を勧められた新郎は返礼として爆竹等の贈物をするということもあった。

回族の「親迎」もほぼ同様であるが，先に帰って婚家入りを待つ新郎方の家では，一行がやってくると門を閉めて贈物を求めるということもあった。この場合，新婦が靴1足を差し出せば門が開かれる。その時，新郎方は新婦の兄弟に矢2本を与え，新婦方の親族達はミルク茶4杯を捧げて互いに3回交拝するという[14]。

婚家入りした新婦が，新郎方の舅姑や親族を敬って挨拶をし，次いで祖霊や祖廟に礼拝して茶を献じる「拝茶」の習慣は各地にみられるところである[15]。湖北省通城県では，祖先に謁拝し舅姑や新郎の兄弟にも挨拶を終え

た新婦は，いったん部屋に戻ってから菓子などを親戚に振る舞うが，これを「餉茶」と言った。また，新婦が拝し跪いて舅姑に茶を献じる礼儀を教えることを「敬茶」というところもある[16]。日本でも，婚家入りした新婦が両親と対面し挨拶を交わすときにオチツキ餅やオチツキ茶が出されたり，祖霊を祀った仏壇などに献茶をするという地域は多い。

式当日の贈答物は実に多彩で，茶のほかに果物・菓子・餅・小麦粉なども贈り物に用いられ，それが親戚や隣人に配られた。その答礼品として服飾が用いられることも多かったようだが，江西省万安県では，そのうちの新婦の衣服を「随茶衣」という。こうして贈答が繰り返される間，世話をしている娘たちが客に茶を献じ，茶を注いでもらった女性客が銭を盤に投げることを「茶盤銭」とも言った[17]。

婚礼には檳榔・椰子，それに古労茶などが饗応物として重視された。また古くは，主人が一族の婦女を招いて合食することを「新婦の米を食べる」といい，そのために各家は油堆・油結・炒米の類を準備したが，主人に代って親戚を饗応することを「代茶」ともいっている[18]。新疆維吾爾自治区の蒙古人の場合，新婦が姑・舅および親戚友人の順に拝礼した後，一家一同が新郎新婦を囲んで座り，共に茶・酒を飲むという。

新婦の髪に笄を付けることを「上頭」あるいは「上頭担」というが，これに関して「上頭茶」の礼というものもあった[19]。新婦方の付添人に赤い服を着せられ髪に花をつけてもらった新郎新婦と仲人それに司会者が順次座ったところで茶が給仕され，新郎が茶を飲む時を待って新婦が部屋を出て堂(応接間のような部屋)に登り祖先に拝し父母に拝するというのは貴州省荔波県の例だが，江蘇省盛湖県では，新郎が堂に上がり，一族の祖先を祭る廟の竈神を一拝してから，迎えてくれた人々の向かいに座り，主人は給仕に茶を 3 回献じさせ，それ以外に菓子などで新郎をもてなすことを「坐茶」といっている。部屋に入って並んで座った新郎新婦に，女の人が糖茶を勧める。先に新郎に飲ませ，次は新婦，続いて蠟燭を取る人やその他の賓客に回す。茶事が終れば饌が進められるが，これを「饌飯」といった[20]。

拝茶や敬茶などの儀が終われば，いわゆる披露の宴となるが，江蘇省阜寧県では，新郎方の家族から婦人1人を選んで女大賓とし，新夫婦を導いて一緒に座って「圓茶」を飲むことを「做富貴(富貴を成す)」といっている。「圓茶」の圓には円満・達成の意味もあるが，ここの「圓」は，結婚翌日に新夫婦が同席して食事をする「圓飯」や，夫婦床入りの「圓房(房は部屋の意)」の「圓」で，「一緒にすることによって一つになった」ことを象徴的に表しているのだろう。

披露宴で，新婦は何度か客に茶を勧め，客は飲むたびに銭を新郎に投げる。宴会が終わるときには，茶の回数が必ず3の倍数になるようにするというのは福建省長楽県の例だが，総じて宴に関わる茶は，ひとつひとつの場面の繋ぎ目に位置して次の段階への移行を促す役割を担っていることが多い。たとえば，安徽省桐城県では，並んで座った新郎新婦の「三献茶」が終われば宴会となり，新郎は西向き，新婦は東向きで座り，固めの食事として料理を食べて酒を飲むという。婚儀を終えた新郎新婦が，席を離れて入室し「交杯茶」を飲むというのも，こうしたところに位置した茶俗であろう。これは古来の合巹という儀礼の名残だとも考えられている[21]。なお，台湾省南投県では，宴会が終われば，「喫茶」の儀式を行うが，ここでいう「喫茶」は，男家の親戚友人，とりわけ親しい人たちが正式に新婦と面会することで，人数が多いから喫茶を何回も行うことになったという。

宴が終わった当日の夕方，来賓たちは男女を問わず新房にごった返すように集まり，新夫婦を大いにからかう。新婦に付添っていろいろな世話をする女性は鍵で食品の入っている箱を開け，菓子やその他の食べ物を取り出して客に食べさせ，新夫婦は茗(茶)をいれてそれを補佐する。これを四川省江津県では「擺茶」といっている。

新婚の夜，老少関係なく新夫婦の部屋に乗り込んでひやかすことを「糖茶を喫す」とか[22]，「食新娘茶」・「喫新人茶」などと言ったが，こうした祝事は各地で盛んに行われた。台湾省台北市の場合，仲人あるいは家族を伴った新郎新婦が，茶盤を手に持って甜茶・蜜糖・冬瓜で客を接待し，客は

その茶を受け取って縁起のいい「喜句」を詠み，飲み終わって新郎新婦が茶杯を下げに来るとき，客は祝礼として金一封を茶杯に入れ，押韻の四つの文(五字か七字)で「喜句」を詠む。宴会に出席しないで専ら「新婦の茶を喫する」ために行く客さえいたという。四川省新繁県でも，「喫新人茶」といって客が新郎新婦をからかって大いに楽しむが，家族は準備してあるものを客に食べさせ，新婦は茶(茗)を沸かして壺(急須)を提げて茶を注ぎ回り，疲れても止めることはできなかったという。

⑶ 式後の茶俗

式翌日の早朝に，新夫婦は礼服を着て，父母や諸親族に拝し四跪三叩の礼を行い，親族たちはそれぞれ金銭を与えるが，これも「拝茶」と言っている。[23] 新婦が舅姑に棗栗や巾履を献上すること，[24] 尊長に靴・靴下，卑幼には巾着を贈ること，[25] あるいは親族全員に対する挨拶なども「拝茶」と称している。[26]

翌朝に廟見を行うことを「拝水」(地域によっては「拝堂」)というが，新婦が舅姑に衣履・巾帯を贈り，衆客には茶菓の接待をすることを「拝水茶」とも称している。[27] 湖南省石門県では，この「拝茶」のことを「大小を分かつ」と言う。「大小」つまり兄弟や親戚の長幼を明らかにする意が込められた儀礼であったと推測される。なお，江蘇省武進県・陽湖県辺りでは，翌朝，新婦が舅姑の寝室へ挨拶に行くことを「蓬頭(髪が梳かされていない様子)茶」と言った。いかにもほほえましい光景を彷彿とさせる一事である。この地域でも，拝堂で舅姑・父君に挨拶することを「分大小(大小を分かつ)」といっているが，砂糖を杯いっぱいに入れることを「満茶(茶を満たす)」といった。また，貴州省沿河県では，堂上に食品を並べ置き，親族がそれぞれ長幼順に列座，そこへ新婦が出てきて盆に茶食を盛り，新郎は茶壺を持ちながら，新婦にこれはどういう関係の親族で何者かを説明して一族の伯叔兄弟・尊卑長幼などを紹介するが，このとき頻りに茶の給仕を促すことを「擺茶」と称している。

式の翌日には，様々な接待とともに贈答も盛んに行われた。福建省安渓県では，舅姑・尊長に挨拶をして茶湯・茶菓子を捧げた新郎新婦は，共に簪などの返礼を受けるという。一方，「望静」といって，新郎が新婦方の家を訪れ茶を献じて贄(礼物)を贈るということもあった[28]。

家同士の交歓も盛んである。北京市では，果物や菓子類を送ることを「点茶」と言っているが，新婦方の家が親類や友人に茶や菓子・餅などを送ることを「開門茶[29]」，燕の巣や朝鮮人参で作ったスープを新郎家に送ることを「送茶」と称する地域もある[30]。福建省藤山県の場合はより盛大で，新婦の兄弟2人あるいは4人が礼装し輿に乗って新郎の家を訪問するが，新郎方は玄関で彼らを出迎えて庁堂で茶を3回献じる「三座茶」・「三座点」が行われ，これが終れば，新郎に部屋を案内されたという。

浙江省衢県では，式後3日目に，新郎方が親戚の女性達をすべて迎え，そこへ新婦を招待する。これを「待茶飯」と言っているが，この時に新婦方の両親を招くということもあり，かりに両親が来られない場合には別の日に宴席を設けて「新人茶飯」を行うこともあった[31]。逆に，「点茶盤」といって，新婦方の家が新郎方の人々を招いて茶事を行うということも行われている[32]。

浙江省南田県では，この3日目に廟見の礼を行う。そのとき親戚を招待し宴を催して茶を献じることを「泡糖茶(糖茶をいれる)」というが，台湾省彰化県などでは，新婦方の家が食物を娘に贈ることを「探房」または「散茶」と称している。ここでいう「散茶」というのは，贈られた食物は新婦1人が食べるのではなく，身辺の人に配る意が含まれていたようだ。台湾省高雄県では，新郎新婦は祖先に香をたいて礼拝し，ついで舅姑および伯叔や親族の長輩に茶を捧げるが，それを受けた人々が返礼する金銀や飾り物の贈物を「圧茶銭」と呼んでいる。

この3日目は新婦が帰省する「回門」の日でもあり，田泰闘の『竹枝詞』には，回門にともなう茶礼に託した母親の気持ちを詠った詞がみえているという[33]。実家では，餅菓子や粗末な食物を準備し，歌を唱い泣き別れ

た娘の里帰りを待った。「回門」にともない，「回門茶」といって新婦方の家では菓子などを準備して饗応に備えるが，それが3日目なら「三朝茶」，7日目なら「七朝茶」といった[34]。このときにも客が集まって茶を飲み，新夫婦をからかうということも行われた[35]。

5日目が回門の日とされている地域もあり，たとえば台湾省澎湖県では，新郎新婦が共に牛車で帰る。新婦の弟が彼らを玄関で迎え，兄が中庭に招き入れて一同が集まって座ったところで，弟はまず卵のスープ，次に蓮の実の点心，それから茶という順番で3回ずつ捧げ，新郎はそれに対してそれぞれ金一封を贈る「押盤礼」という儀礼が行われている。なお，新婦が1ヶ月後および年節(祝日)に帰ることを「担茶」といい[36]，婚家双方が，歳時ごとに挨拶に赴いて釵環簪珥などの贈答を行うことを「出茶」と言う地域もあった[37]。

湖北省黄陂県では，「三朝茶」に加えて9日目に婚家に茶菓を送ることを「九朝茶」と称している。なお，3日目に新婦が「中饋」を務めることを「下厨房」，つまり台所に入るといい，この日に実家で準備してきた茶菓を尊長や親戚に配る次第のことを「傳茶」と言った[38]。広東省龍山県では，7日目に彩色の段子やアクセサリーを新婦に贈ることを「洗頭」と言い，それらの贈り物をせず簡略に粉菓・酒食で済ますことを「洗頭茶」・「洗頭庸」という地域もあったという。逆に，江蘇省丹陽県のように，式当日の「進門茶」に始まり，式後の「三朝茶」「七朝茶」「十四朝茶」「満月茶」「節茶」「年茶」に至る，節目ごとの茶俗を有しているところもある。

以上，『中国地方志』から検出した中国各地の婚礼茶俗を概観したが，その有り様も呼称も実に多様・多彩であることがわかる。総じてみれば，謝意をこめた贈答や接待儀礼に伴う事例が多く，この点においても，日本の婚礼茶俗との比較が可能である。その同異を知るため，次には日本の場合を見ることにしよう。

2. 日本の婚礼と茶俗

『日本民俗地図』が調査対象とした地区は，都道府県ごと30地点が基準とされ，途中から沖縄県が加えられて全国で1342地区数に及んでいる。これらのうち，今回，検討の対象とした茶俗記載が確認できたのは215地区(258件)で，図 1 で示したように，その地域分布には明らかな濃淡が存在する。(39)

婚礼茶俗は，関東および九州北域に濃密に分布している。とりわけ，関東地方においては神奈川県で15地区，東京都で10地区と多く，隣接する新潟県は12地区を数えることができる。一方，九州地方では，熊本県の15地区を筆頭に，佐賀県14，福岡県13，長崎県11，鹿児島県 9，大分県・宮崎県が各 8，以上計78地区，全体の 36% がこの地方に集中して分布していることは注目される。

日本の婚姻は，婿入り婚・嫁入り婚・足入れ婚の 3 類型に大別されるが，ここに検出した事例の多くは嫁入り婚である。この婚礼は，式前の見合い(認知)・婚約・結納，式当日の嫁迎え・出立ち・中宿・婚家入り・盃事・披露宴，式後の贈答・接待等といった一連の儀式によって成り立っており，それぞれに地域的な特徴を見いだすことができる。以下，段階ごとにその茶俗の具体的な事象を検討したい。(40)

⑴ 「見合い」の茶俗

日本の婚姻形態は，時代や地域によって異なるが，近世・近代の伝統的あるいは旧村落内の婚礼とは異なり，その第一段階にあたるのが「見合い」である。一般的には，仲人に連れられた男性が相手方の実家に行って娘と会い，気に入れば内諾の印として扇子などを残して帰るという形態が多い。『日本民俗地図』から，この「見合い」に関する茶俗記載が確認されたのは10地区と意外に少なく，これだけの数によって分布にみる地域的

図１　婚礼茶俗の分布

表1 「見合い」茶俗の確認地区一覧

栃 木 県	芳賀郡茂木町牧野	飲茶で合意
	下都賀郡桑絹町	飲茶で成立
埼 玉 県	草加市柿木町	飲茶で承諾
神奈川県	足柄下郡箱根町	飲茶で成立
	小田原市早川	飲茶で成立
山 梨 県	北巨摩郡白州町	女の家でお茶
愛 知 県	丹羽郡岩倉町	茶が出される
大 阪 府	河内長野市流谷	娘が出す茶
奈 良 県	宇陀郡大宇陀町	茶で見合い
山 口 県	美禰市於福町	茶をくませる

特徴は明らかにできないが，どちらかというと日本海側は希薄で，四国・九州地方には確認できなかった。

「見合い」茶俗の基本は，神奈川県足柄下郡箱根町仙石原で「娘がお茶を出し若者がそれを飲むと成立したことになる」とあるように，出された茶を飲めば縁談が成立するというものだが，なかには大阪府河内長野市流谷で「娘が茶を出すものを，気に入ったら全部飲んでしまわないで残し，気に入らないと飲みほす。なお気に入ると婿側は扇子を置いて帰る」というように，逆のケースも存在した。

⑵ 「婚約・結納」の茶俗

婚約および結納の儀に茶が用いられる習俗として『日本民俗地図』から記載が確認されたのは計52地区，うち「婚約」に関するものは22，「結納」は30で，全体からみれば事例数の多い茶俗である。その分布は，新潟県（9地区）・福島県（4地区）と九州地方に極端な偏りをみせており，なかでも福岡県（9地区）・佐賀県（8地区）・熊本県（5地区）など北半域に濃密である。

図 2 「見合い」茶俗の分布

表２「婚約・結納」茶俗の確認地区一覧

福島県	岩瀬郡長沼町	飲茶で決定	佐賀県	佐賀郡富士村	カタメ，結納茶
	須賀川市塩田	固メノ茶入		伊万里市波多津町	チャノモン(結納)
	西白河郡矢吹町	オ茶入レ		西松浦郡有田町	オ茶開キ(結納開き)
	西白河郡表郷村	茶入レ		武雄市武雄町	茶持参
群馬県	吾妻郡中之条町蟻川	持参の茶をつぐ		鹿島市高津原納富分	オチャ(結納)披露
東京都	利島村	飯と茶で接待		藤津郡塩田町	結納をオ茶,チャビラキ
新潟県	南蒲原郡下田村	お茶をのむ		藤津郡太良町	チャブンミャア(茶ビラキ)
	見附市杉沢町	茶スマシ			
	栃尾市山葵谷	茶スマシ	長崎県	南松浦郡三井楽町	決定をオ茶
	三島郡出雲崎町	オ茶(贈答)		佐世保市早岐	結納品持参で嫁迎え
	三島郡越路町	茶配り	熊本県	飽託郡天明村	茶を届ける
	南魚沼郡六日町	茶を届ける		葦北郡葦北町	納品の茶と帯
	中魚沼郡津南町	祝イノ茶		球磨郡須恵村	茶持参，茶入レ
	東頸城郡松之山町	贈品の茶		球磨郡五木村	茶入レで成立
	中頸城郡柿崎町	結納品の茶		阿蘇郡小国町	オ茶
石川県	金沢市新保本町	オチャゲ	大分県	下毛郡邪馬渓村	茶祝儀
香川県	仲多度郡多度津町	オチャする		大分郡湯布院町	タノメ，茶等持参
福岡県	豊前市合川	茶祝儀		大分市徳丸	茶一袋持参
	北九州市小倉区	茶祝儀	宮崎県	宮崎郡佐土原町	茶イレ
	田川市東区	結納茶		北諸県郡中郷村	若い娘さん
	飯塚市明星寺	茶婿入リ		宮崎市広原麗	茶等の納品
	粕屋郡新宮町	お茶着物	鹿児島県	出水市丸塚	嫁方に茶持参
	浮羽郡浮羽町	釘茶		出水郡野田村熊陳	茶モドシ
	三猪郡大木町	贈品の茶		川辺郡笠沙町	茶等を贈る
	大川市榎津	贈品の茶		肝属郡東串良町	オ茶ノミで成立
	三池郡高田町	贈品の茶	沖縄県	石川市石川	チャラグ持参
佐賀県	佐賀郡大和町	固メの茶			

〔婚約と茶〕

婚約に伴う茶俗は，福島県を筆頭に群馬県・東京都・新潟県・石川県，それに四国の香川県に見られるが，大半が九州に分布している。

「だいたいの話がまとまると，「茶」で正式の取り決めが行なわれる」というのは福島県岩瀬郡長沼町長沼の例で，「お茶をのむ」あるいは「オ

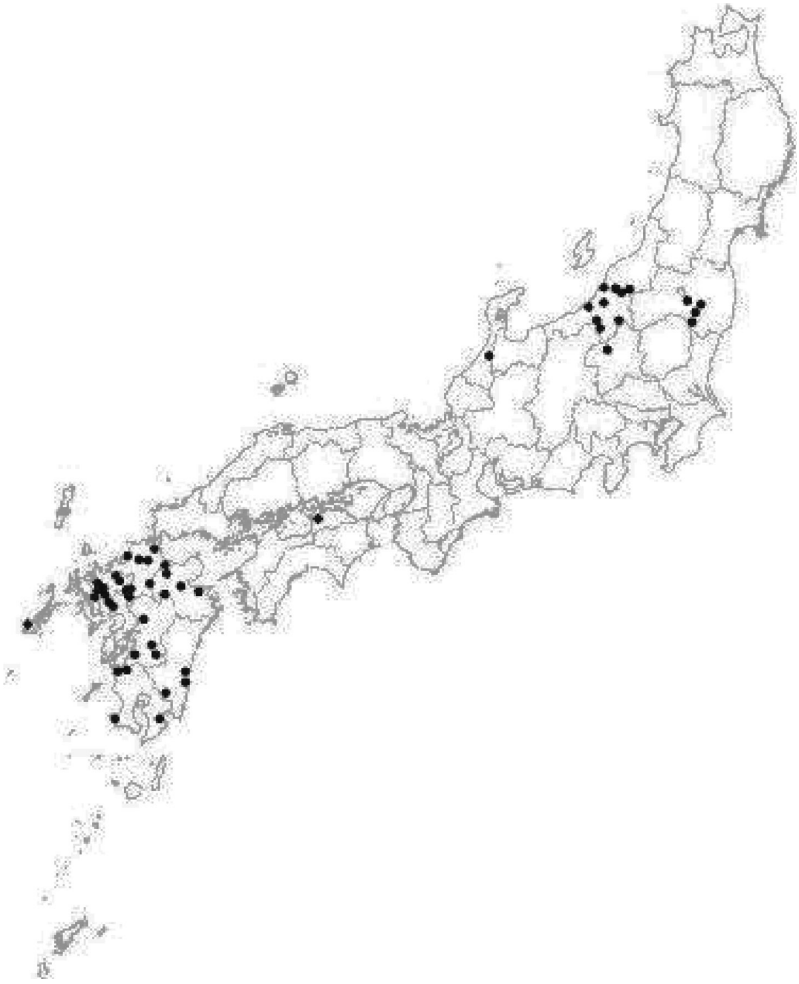


図３ 「婚約・結納」茶俗の分布

茶」「オ茶ノミ」という表現自体が婚約の定まったことを意味することがある。[41] 石川県金沢市新保本町のように「オチャゲ」が正式の婚約で，「オチャする」とか「オチャいれる」という言葉が婚約決定の内宴のことである場合もあった。[42]

福島県須賀川市塩田では，婚約のことを「固メノ茶入」と称しているが，佐賀県佐賀郡富士村麻那古の場合，「仲人が，カタメといって，オ茶ゴウされるだけの物を持って嫁の家に行き，ヒドイ(結婚式の日どり)をきめた」という。ここでいう「オ茶ゴウ」というのは，九州でもとりわけ佐賀県に広く存在する「茶講」という隣保組織のことで，冠婚葬祭の相互扶助など，活発な近所付き合いが展開される。仲人が持参する「オ茶ゴウされるだけの物」とは，婚約決定の内宴などで「茶講」の人々に振舞われる品々のことだろうか。同県武雄市武雄町川良では「カタメ」を済ませた後に茶を持参して式の日どりを決めたという。

福岡県浮羽郡浮羽町田籠では，婚約のことを「釘茶」とも言っている。「オ茶入レ」あるいは「茶入レ」と称する地域も多いが，[43]「縁談が成立すると茶を届ける」という新潟県南魚沼郡六日町泉では，「茶を受けると嫁方では茶披露といって，近隣・親類を招いて茶を見せる」ものとされていた。「茶モドシ」といって「話がまとまると，2～3日して仲人と嫁方の母親が茶モドシとして餅を婿方に持ってくる」が，これが結納になり，[44]「婚礼のとりむすびがすむと，花嫁は実家から用意してきたお茶・お菓子を出して親戚や女衆に1人ずつついで回る」ということもあった。[45]

婚約にともない，「茶祝儀」とか「オチャ」といって様々な贈答が行われるが，[46] 東京都利島村の場合は「モライウケの翌日に婿方のおじ・おばが嫁方に来て，嫁を連れて婿の家に帰る。このとき嫁はふだん着のまま1人でついて来て，婿の両親にあいさつする。婿の家ではヨメニギリといって，婿の両親・おじ・おば・近所の婦人が集まり，嫁とともに握り飯と茶で接待する」とあり，これを「アシイレ」とも言った。

〔結納と茶〕

『日本民俗地図』から検出できた「結納」に関する茶俗事例は30件だが，新潟県の７例以外は全て九州の各地，とりわけ福岡県と佐賀県に集中的に分布している。

新潟県では，吉日を選んだ結納の日に「手打チ酒を飲みかわす」こと，あるいは仲人が酒・お茶・昆布・するめ・布地を嫁方の家に持参して約束の固めをすることを「茶スマシ(チャズマシ)」と言っているが[47]，こうした正式の決定とそれに伴う物品の贈答を単に「オ茶」と呼ぶところもあった[48]。結納品のなかに茶が含まれることは多く[49]，中魚沼郡津南町上郷宮野原では結婚式の当日に持参しており，これを「祝イノ茶」と称している。

九州でも，式当日あるいは前日に茶などの結納品が持参される例がみられ[50]，福岡県飯塚市明星寺字北谷の場合，「式の前に，結納を嫁方におさめる。このとき，茶婿入りをすること」もあった。また，大分県大分郡湯布院町塚原では「結納はタノメといい，式の２～３日前，または前日，場合によってはその日に，末広・こんぶ・のし・米・茶・酒・肴・小袖・おび・ぼうし・じゅばん・からかさ・くし・こうがい・紅粉・おしろい・げた・たびなどの祝儀物・着物を持って行く」という。

しかし，結婚式より以前，婚約から一定期間をおいて結納の儀が行われるというのが一般的で，結納を「茶祝儀」と呼んでいるところもあるが[51]，その品目が「丸帯一本とお茶」という「茶帯」で，返礼に袴地１反を納めるという例も存在する[52]。また，大分県大分市徳丸では「仲人は，祝言の吉日をえらんで結納の品を嫁方にもって行った。お茶一袋は必ずもって行くものとし，その他の品は家の程度によってそれぞれ違うが，娘には反物，両親には反物または足袋，兄弟には足袋または歯下駄などを贈った」という。

男性の家から結納の品を持っていくことを「タル入レ」とか「茶入レ」と称する地域があるのは，その品目が「済ミダルとして，しょうちゅう・煮しめ・茶」であることによるが[53]，「お茶着物」を贈るということもあっ

た。[54]佐賀県佐賀郡大和町名尾では「固メ」と称しており，「反物・紋付き・帯・げた・着物・お茶・あげちくわ30本，コンニャク40～50個，大根・にんじん・ごぼう・れんこん・さば・あじ20人前，酒の赤だる（5升ぐらい）2本ぐらいで，角メゴに入れて，男の親類などが5人～10人くらいで持っていく」という。

結納と茶との関係で興味深いのは，佐賀県に特徴的な「オ茶開キ」である。鹿島市大字高津原納富分字若殿分では，「婿方から嫁方に結納を贈る。嫁方では，チャ開キといって，親戚やコガのものをよんで祝いをし，オチャ(結納)の披露をする」といい，同様に藤津郡塩田町町区でも「結納をオ茶といい，婿方から嫁方へ品物を贈る。オ茶ニナイがかつぎ，仲人と婿の母が行き，ときには婿も同行することがあった。(中略)嫁のほうでは，オ茶がくると嫁側の親類・コガ・知人を招き，チャビラキといって，オ茶を披露し宴を開いた」とある。このチャビラキを「チャブンミャア」と称するのは同郡太良町大浦字竹崎の例である。なお，沖縄県石川市石川では，結納の日に男の家から酒とチャラグ(膳に盛ったオ茶ワキ＝御茶受)を持参し，女のほうの近親も招待されて互いに盃をかわし懇談したという。

⑶ 「嫁迎え・出立ち・中宿」の茶俗

結婚式の当日，新郎側から迎えが来たり，嫁が生家を出るときに別れの挨拶をしたり，中宿などと称して途中で休憩をとったり，こうしたときにもしばしば茶が登場する。『日本民俗地図』からこうした茶俗の記載が確認されたのは計21地区，その内訳は，「嫁迎え」に関する茶俗が13，「出立ち」に伴うものが3，「中宿(休憩)」が5，決して多い事例とはいえないが，関東地方と九州北半域に広く分布している。

〔嫁迎えと茶〕

嫁入り婚において，式当日の嫁の引き移りにともない婿方が迎えに行くなどといった習俗を，一般的に「嫁迎え」と称している。これに関する茶俗は，福島県・新潟県・静岡県と四国の香川県，そして長崎県を中心に九

表3 「嫁迎え･出立ち･中宿」茶俗の確認地区一覧

岩手県	下閉伊郡川井村	茶屋使イ，飲茶
福島県	安達郡安達町	茶を贈る
埼玉県	児玉郡神川村	中宿で茶の接待
神奈川県	中郡大磯町	別れの茶会
新潟県	十日町市鉢	茶ゴト・茶ブルマイ
	中魚沼郡津南町	祝イノ茶を背負う
山梨県	甲府市黒平町	中宿でお茶
	西八代郡市川大門町	近所のお茶呼び
静岡県	田方郡土肥町	茶袋女の迎え
兵庫県	養父郡関宮町	中宿で飲茶
香川県	三豊郡大野原町	茶ダラ持参
長崎県	北松浦郡小値賀町	茶を飲干す
	南松浦郡新魚目町	茶持チ
	南松浦郡有川町	贈品の茶
熊本県	八代市妙見町	タチヤドで飲茶
	球磨郡球磨村	お茶少々持参
	阿蘇郡波野村	婿は茶前に帰る
大分県	臼杵市東神野	茶など持参
宮崎県	東臼杵郡西郷村	茶など持参
鹿児島県	日置郡郡山町	贈品の茶
沖縄県	石川市石川	チャラグ持参

州に広く分布しているが，大分県臼杵市東神野で「結婚式当日，男のほうからは男親・仲親夫婦・母親代わり・親戚の者・組合の荷運びが，嫁迎えに行く。持って行く物はスボに包んだたい2匹・角だるに入れた酒2升～5升・米・茶である」とあるように，その大半は茶の贈答に関する茶俗である。

新潟県中魚沼郡津南町上郷宮野原では「結婚式を嫁ドリといい，もらうほうからは仲人とおやじ，それに荷として祝イノ茶を背負って行く役の荷ソイが嫁方に行く」というように「祝イノ茶」と称しており，「茶袋(女)」や「茶持チ」を伴なって迎えに行くき，嫁の家で酒宴を行なうという場合もあった(55)。持参する茶を「茶ダラ」というのは香川県三豊郡大野原町箱室

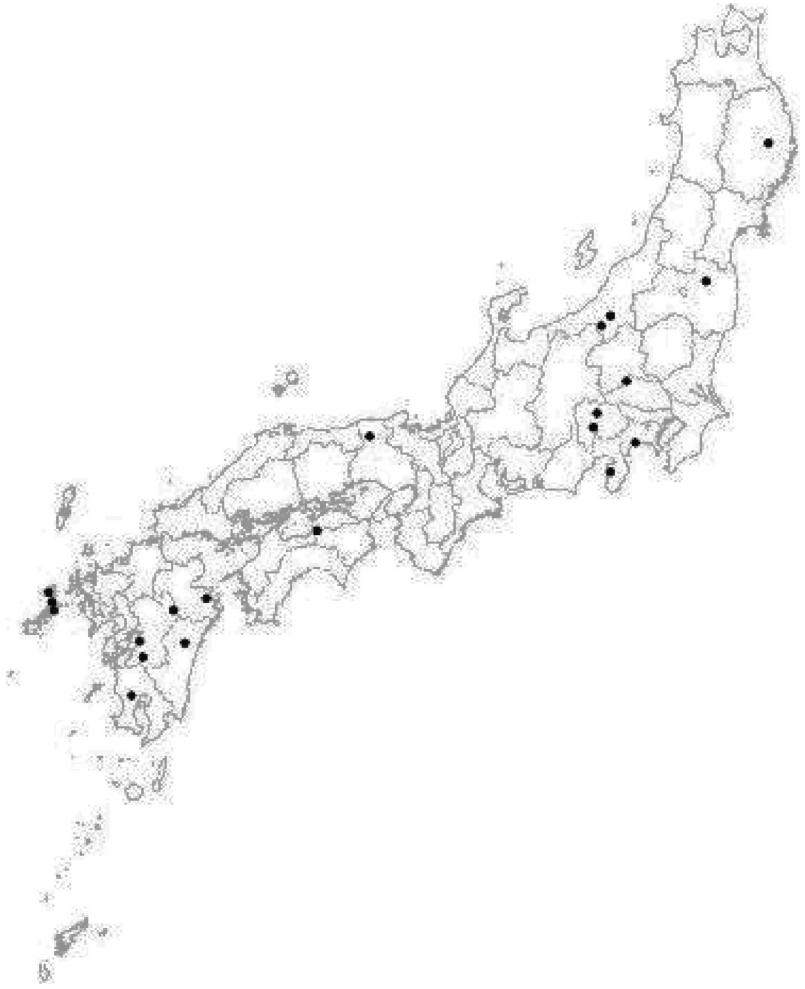


図 4 「嫁迎え・出立ち・中宿」茶俗の分布

浜の例で，沖縄県石川市石川では「チャラグ」などを持参しているが，なかには，「仲人で話がまとまると，仲人の家の嫁 2 人が仕事の合い間を見てふだん着のまま花嫁を連れに行く。迎えに行った者は，差し出された茶を土間に立ちながら飲み干し，働いている嫁をふだん着のまま婿方につれていく」という簡略なものもあった。(56)

〔出立ちと茶〕

嫁の出立ちに際し，神奈川県中郡大磯町大磯では「タチブルマイといって親戚や近所の人を呼び別レノ茶会をする。このときには，嫁が一人一人にお茶をついで回り，今までの礼をいう」とあり，山梨県西八代郡市川大門町山家では「近所ノオ茶ヨビ」を行っているが，「嫁の出て行ったあとに茶ゴトあるいは茶ブルマイといって近親・縁者で祝う」という場合もあった。(57)

〔中宿と茶〕

婿方に向かう嫁の一行が途中で立ち寄り休憩する家のことを，一般的に「中宿」と称しているが，ここでも茶が飲まれる。(58)

中宿となる家は，村内婚では婿の家の近くであったり，婿方の仲人あるいは婿の親方の家であったりするが，村外婚の場合は花嫁の村入りを意味することから，その村の有力者あるいは出入り口近くの家が多かった。兵庫県養父郡関宮町丹戸の場合は婿方の村に入ったところが中宿とされ，「嫁の一行は，まず中宿で休んで，お茶を飲み」，そのあと衣装を整えて婚家に入った。中宿を「タチヤド」と称するのは熊本県八代市妙見町の例だが，岩手県下閉伊郡川井村箱石では，「近迎えとして若者 2，3 人が，ちょうちんと酒を持って途中まで迎えに行き，茶屋使イといって，嫁と一緒に休憩をしてから婚家に着く」としている。

⑷ 「婚家入り」の茶俗

婿方の歓迎をうけて家に入った嫁は，まず舅姑らに挨拶をし仏壇にまいるが，この場面でも茶が登場する。『日本民俗地図』からこうした茶俗の

表4 「婚家入り」茶俗の確認地区一覧

宮 城 県	柴田郡柴田町	嫁が持参の茶をたて舅姑に飲ませる
	宮城郡七ヶ浜町	手土産の茶を両親につぐ
	桃生郡鳴瀬町	両親に手みやげとお茶を渡す
秋 田 県	秋田市大平	茶と白扇を贈る
福 島 県	岩瀬郡長沼町	座敷に上って飲茶
	西白河郡表郷村金山	座敷で茶
	東白河郡矢祭町	座敷で茶
茨 城 県	新治郡八郷町	式場でお茶・落チツキなど
埼 玉 県	比企郡川島村	茶と菓子
千 葉 県	香取郡干潟町	年寄りが茶を出す
神奈川県	足柄上郡南足柄町	座敷につくとお茶
	平塚市土屋惣領分	まず茶と菓子
富 山 県	中新川郡上市町	お茶を一杯いただいてから仏壇参り
長 野 県	下伊那郡高森町	部屋で休み飲茶
	下伊那郡南信濃村	すぐ茶を出す
愛 知 県	犬山市栗栖	まず台所でお茶
岡 山 県	英田郡東栗倉村	挨拶後に飲茶
山 口 県	都濃郡鹿野町	オチツキの茶
高 知 県	土佐郡本川村	嫁方座で飲茶
福 岡 県	筑後市溝口	茶と嫁入道具交換
熊 本 県	鹿本郡鹿北町	席につくと茶
宮 崎 県	延岡市島野浦	座に招いて茶

記載が確認されたのは計22地区，関東から東北南部にかけて広く分布するが，九州地方は北半域の佐賀県・長崎県と宮崎県を合わせても3地区と予想外に少ない。

婿家に入った嫁に儀礼的な食物として出される餅を「オチツキ餅」などと言い，婚姻成立のために花嫁が食べなければならない食物であった。こうした習俗は，ほぼ全国に分布しているが，このときに差し出される茶を「オチツキ茶」などと称しており，三三九度の盃事に先立って行われることが多い。山口県都濃郡鹿野町西河内にその例をみると，「嫁が式場につくと，まず引き受け人(その日の進行役)が迎える。嫁方の仲介人が持参したものを出すと，引受人はそれを目録によって引き合わせ，婿方の仲介人

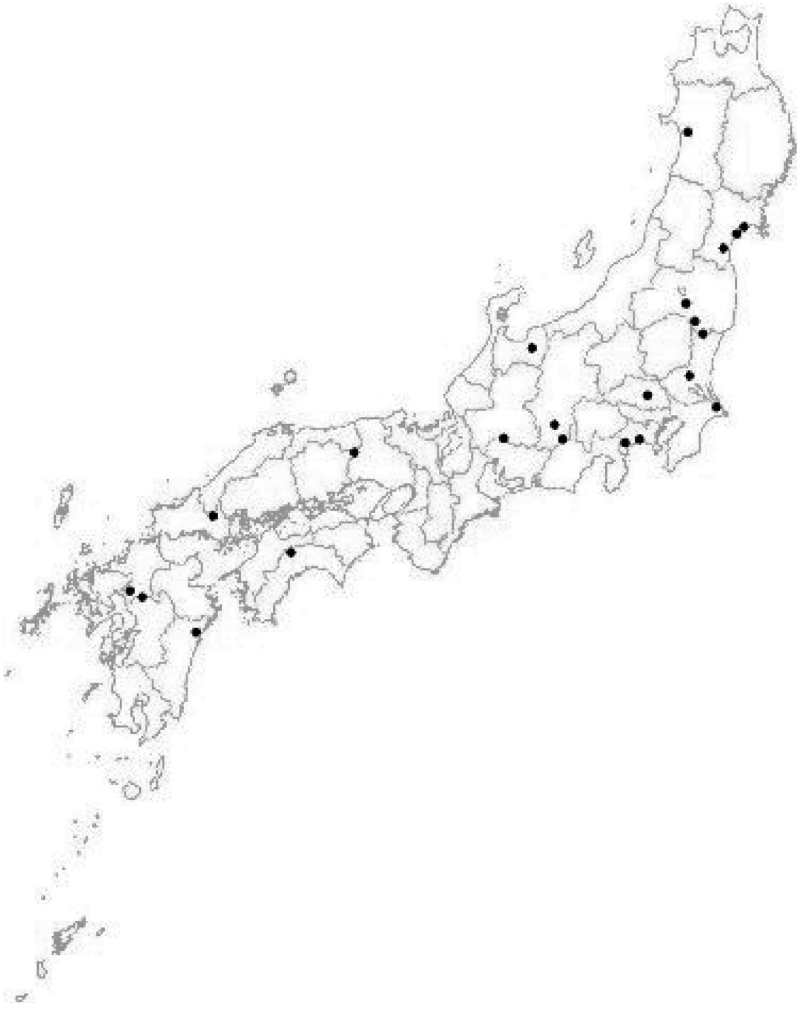


図5 「婚家入り」茶俗の分布

に渡す。引き合わせの式が済むと，オチツキの茶が出，そのときはじめて座ぶとんが出される。それから座敷に案内されると，引受人が，礼・三三九度の盃事・両家の引き合いをとりおこない，それが終わると宴会となる」という。花嫁が「オチツキの茶」を飲むのは婚家の食物を初めて食べるのと同じで，それは婿方の人間になったことを象徴する呪術的な意味が込められた行為であった。

婚家の玄関口や大戸から入った嫁には「まずお茶が出，それからオチツキボタモチが出され，そのあと膳部がそろうと，三三九度となる」というケースが一般的だが[59]，富山県中新川郡上市町東種では「お茶を一杯いただいてからしゅうと・しゅうとめと共に仏壇参り」を行っている。また，嫁の入口についても台所からということもあり，たとえば宮城県柴田郡柴田町船迫では「婚家にはいるときには嫁は台所から入るが，その際，すげ笠が頭にかざされ，敷居をまたいだまま一銭銅貨の入った茶わんで水を飲む。次いで，嫁は持参してきた茶(仲人が返事に来た時もってきたもの)で茶をたて，舅と姑に飲ませる」という。

同様の事例が宮城郡七ヶ浜町湊浜でも確認できるが，千葉県香取郡干潟町長部で「嫁は婿の家に着くと，ヂョウボグチから入る。このとき雌蝶・雄蝶と呼ばれる子供が「でたら入るな」と3回いいながら，わらの棒で嫁の尻をたたく。それから嫁はシタベヤに入り，ここで婿方の年寄りから茶をもらう」とあるのも興味深い。なお，「オチツキ茶」が出される場は座敷であることが多いが，「嫁が到着すると，屋敷前で菓子を投げてはやしたてる。嫁は見物の人たちを押し分けて家の中に入り，まず台所でお茶をよばれ，ひとまず休憩する」とあるように[60]，「台所でお茶」という場合もあった。

婚家入りにあたって，さまざまな贈答が行われた。宮城県桃生郡鳴瀬町宮戸島では「嫁は婿の家に玄関から入る。嫁がその敷居をまたぐ際に，すげ笠を頭にかぶせるまねをする。それから台所の炉ばたに坐って，婿の両親に手みやげとお茶を渡す」とあり，その贈答が「お茶と白扇[61]」，あるい

は「お茶と嫁入り道具を交換」ということもあった[62]。

⑸ 「盃事」の茶俗

オチツキ茶を済ませた花嫁は，次に三三九度などの盃事に入る。『日本民俗地図』からこうした茶俗の記載が確認されたのは計14地区と少なく，分布についてもさほど地域的な特徴は見いだせない。

順序としては，長野県大町市社字宮本のように「座敷で，まずお茶が出て，続いて落チ着キノオジヤ(雉の肉のおじや)が出る。そして三三九度の盃となり，これがすむと落チ付キノオ餅が出て，本膳となる」というのが一般的で，愛知県幡豆郡幡豆町鳥羽では「稚児の茶出し」が行われている。また，福岡県大川市榎津の結婚式は夜間に行われることが多く，「まず一同着座してお茶・のしなどを出し，謡三番のうちに三三九度の盃をとりかわし，家族のあいさつがあって式を終わる。引き続き酒宴となり，夜明けまで続く」というように，謡が伴うこともあったが[63]，広島県加茂郡八本松飯田の「結婚式のさかずき事は，夫婦・親子・親類盃の順で行なわれる。次いで一茶席があり，披露宴となる」というように，茶は式場入りや披露

表５ 「盃事」茶俗の確認地区一覧

宮 城 県	名取郡秋保村	客の飲茶で盃事へ
千 葉 県	印旛郡八街町大関	茶が出て盃事
東 京 都	北多摩郡村山町	茶を飲んでから式場入り
長 野 県	大町市社字宮本	まずお茶，ついで盃事
愛 知 県	幡豆郡幡豆町	稚児の茶出し・祝儀の盃の順
三 重 県	安芸郡芸濃町	茶礼の後に盃事
兵 庫 県	美嚢郡吉川町毘沙門	茶・茶菓子，その後夫婦の盃
島 根 県	八束郡八雲村熊野字稲葉	一献茶が出てから盃
広 島 県	加茂郡八本松飯田	一茶席があり，披露宴
高 知 県	吾川郡吾北村	茶・吸い物をして三三九度
福 岡 県	三猪郡大木町	お茶などを出し，三三九度の盃
	大川市榎津	お茶などを出し，三三九度の盃
	三池郡高田町	お茶が出て，後に盃事
佐 賀 県	東松浦郡玄海町	茶を飲んだ後に三三九度

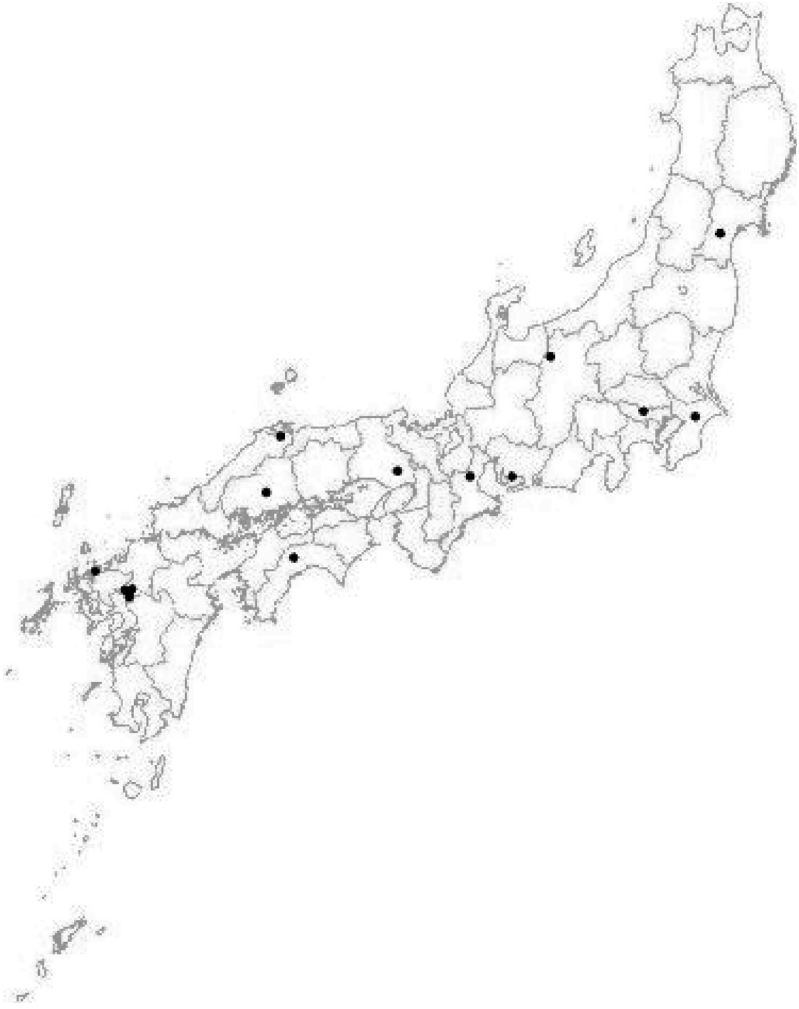
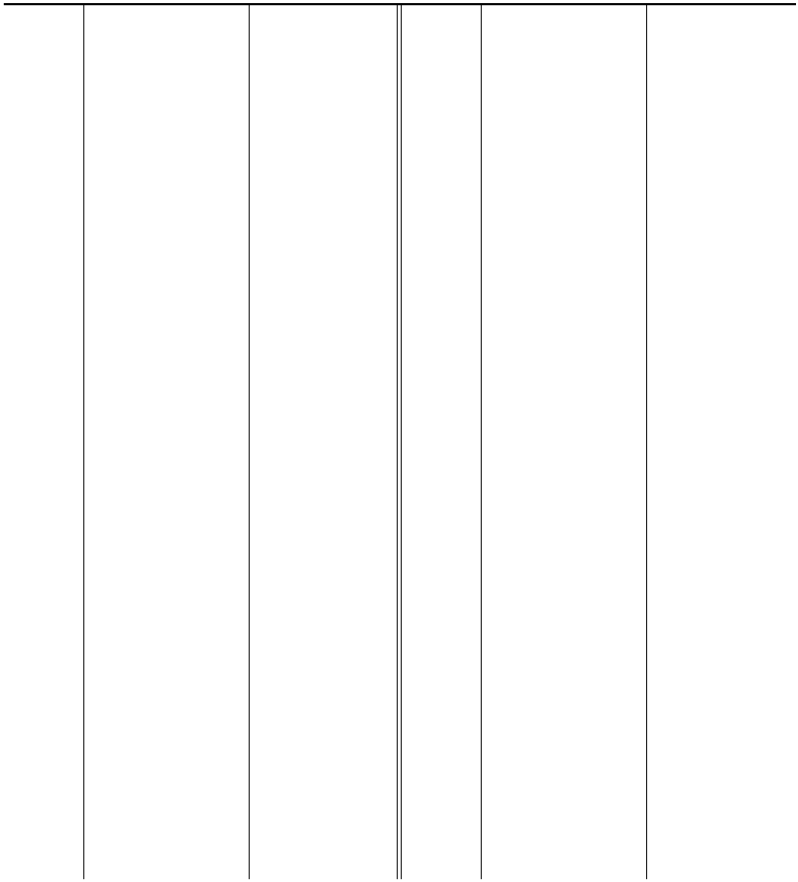


図6 「盃事」茶俗の分布

宴への引導の役割をも果たすこともあった。(64)



るが，その他の地域では殆ど記載が確認できなかった。

〔披露宴と茶〕

披露宴では，祝儀や歓待謝意をこめた酒・料理はもちろんのこと，茶が振る舞われることも多い。福岡県豊前市合川では，「主座・たる座・茶呑み」の順序で祝宴が催され，田川市東区伊田の場合，「酒宴は本客のほか，タル入レといって若者組の酒宴，オ茶ノミという娘組の酒宴３回で，３日間にわたって行なう」という。披露宴を「お茶事の式」と称しているのは福島県福島市鎌田の例だが，この地区では「２日目には，朝ブルマイがあり，その夕は女客のみのお茶事」が行われている。

花嫁が親戚や友人に茶を振舞うことが「家人になったことを示す」と理解するところもあるが[65]，ことに際して訪問着などに着替えるということも多い[66]。東京都青梅市では，この着物を「茶くみの着物」としており[67]，それは「ふだん着の中では一番良い着物」であったという[68]。

こうした嫁による茶振舞いを「オ嫁サンノオ茶」「ヨメノチャ」と呼ぶことは多いが[69]，ほかに宮崎県や鹿児島県では「オ茶クミ」とか「嫁ジョノ茶」と言っている[70]。なお，茶講と称する隣保組織が存在する九州では，長崎県の例にみられるように，この嫁の茶振舞いは「仲間入り」として重要な意味を担っていたという[71]。

披露宴が終わった後，近隣・友人その他の関係者を対象とした宴が催されることも多く，山形県飽海郡八幡町北青沢では，これを「茶」と呼んでいる。秋田県本荘市鳥田目の場合，嫁と婿の両親と親類だけが参列して「誓いの式」が行われ，その翌日が婚礼とされているが，その夜，「村茶屋といって部落中を招待して嫁披露」した。披露宴は２日目に行われることもあり，大阪府茨木市銭原では，「親族・知己を招待して，これをヒロメのチャビ」と言っている。「近隣の主婦は別に招き，これを茶ノミ客という」のは山口県大津郡日置村黄波戸の例である。

なお，神奈川県では披露宴の途中で嫁が近所に挨拶回りをする習慣があり，そのときにお茶を少し包んで持ち回るが[72]，愛甲郡清川村煤ヶ谷ではこ

れを「ハナビキ」と称している。

〔宴終了と茶〕

さて，披露宴の茶俗として興味深いのは，宴もたけなわを過ぎた頃に新婦が宴席の人々に茶を注いでまわり，それをきっかけにして，来賓たちが散会するという慣習である。こうした事例は20余を検出しているが，その多くは関東を中心に分布しており，ほかに岐阜県と愛知県，九州の熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県などにもみることができる。

たとえば，群馬県にその例をみると，沼田市下川田では「嫁はしゅうとめの指図に従って，持参したお菓子をお客やお勝手の人々にはさみ，お茶をだす。これを嫁ゴノオ茶といい，このお茶を飲むと一般の人々はそろそろ帰る」とあり，多野郡鬼石町三波川では「宴が終わると，嫁は茶を入れて出す。これを嫁ノ茶といい，これによっておひらき(解散)となる」とされている。「最後に，ヨメノオ茶といって，嫁がお茶を出して解散」というのは埼玉県も同様[73]で，飯能市中藤では「宴が終わるころに嫁茶といって，新婦が座に進んで茶をたて，万座の客にすすめる。饗応が終わり，めいていした客が庭に出ると門送リ酒といって盃と徳利をもって追いかけ，酒を強いる」とされていた。

披露宴の最後に振舞われる嫁の茶は，いずれの地域においてもほぼ同様の意味をもっており，神奈川県川崎市宮崎町土橋の場合，「この茶は一杯限りで，これが合図で式は終わる」と極めて明瞭である。なお，先に「嫁ゴノオ茶」「ヨメノオ茶」「嫁茶」とあったが，東京都保谷市上保谷では「ワカレノ茶」と言われており，山梨県や岐阜県・愛知県では「イケッ茶」「イケチャ」(行け茶)[74]，大分県では「イネ茶」と呼ばれている[75]。

(7) 「式後」の茶俗

結婚式の前後，とりわけ式後にも，茶は，隣近所や親戚の人々に対する振舞い(接待)や嫁を連れての茶配り，あるいは里帰りにともなう土産茶など，様々な用いられ方をしている。

表7 「式後」茶俗の確認地区一覧

宮城県	宮城郡七ヶ浜町	オ茶ブルマイ	長野県	埴科郡松代町	オチャコ
	遠田郡涌谷町	茶開キ		大町市社	茶と菓子
山形県	山形市平清水	披露の茶	三重県	安芸郡河芸町	翌日にカカ茶
	山形市高沢	ムガサリの夜にオ茶接待	滋賀県	高島郡安曇川町	茶入レ
	鶴岡市田川	オ茶フルマイ		滋賀郡志賀町	茶ワカシ
	東田川郡藤島町	オ茶(披露)		近江八幡市沖島	近隣と飲茶
福島県	伊達郡梁川町	茶ブルマイ(祝宴)	兵庫県	加東郡社町	オチャに招く
栃木県	日光市鉢石町	オ茶ゴト振舞い		加東郡社町	オチャに呼ぶ
埼玉県	深谷市深谷	嫁ノオ茶ヨビ		美嚢郡吉川町	「お茶をたく」
千葉県	印旛郡八街町	茶をごちそうになる	奈良県	山辺郡山添村	同族の家で茶
神奈川県	足柄下郡真鶴町	茶クバリという女の子	山口県	小野田市高千帆	茶の接待
	秦野市蓑毛	オ茶ブルマイ	香川県	大川郡白鳥町	お茶で接待
	平塚市土屋惣領分	茶を配る	福岡県	甘木市屋永	オ茶ノミ
	中郡大磯町	茶をそえて回る	佐賀県	唐津市佐志町	嫁が茶をくむ
	中郡伊勢原町	茶ブルマイ		東松浦郡玄海町	茶開キをして披露
	茅ヶ崎市高田	ナビロメの茶		西松浦郡有田町	オ茶クバリ
新潟県	栃尾市山葵谷	オ茶(酒盛り)		鹿島市浜町	茶ブンミャア
	長岡市栖吉町	茶ゴト(もてなし)		鹿島市高津原納富分	茶ブンミャア
	三島郡出雲崎町	茶ブルマイ		藤津郡塩田町	嫁ノ茶クバリ
	三島郡越路町	オ茶振る舞い		藤津郡嬉野町	オ茶クバイ
	中魚沼郡川西町	茶事	長崎県	東彼杵郡波佐見町	訪問先で塩茶
	中魚沼郡津南町	手みやげに茶	熊本県	葦北郡葦北町	茶ノミ(女客を接待)
富山県	中新川郡立山町	村民を招き茶	大分県	速見郡山香町	胡椒入茶を嫁に飲ます
	下新川郡入膳町	披露の茶		日田市小野	オ茶ノミ(招待の宴)
石川県	金沢市新保本町	オチャ(近隣を呼ぶ)		日田郡中津江村	嫁ゴ茶を汲む
	小松市大杉町	茶ノミ(贈礼)	鹿児島県	串木野市羽島浜	近所に茶を振舞う
福井県	坂井郡丸岡町	チャノミ			

式後の茶俗として最も多くの事例を検出できるのが，式翌日あるいは2・3日後に親戚や来客それに隣近所の主婦らに振舞われる接待の茶で(食事が出たり酒宴を伴う嫁披露であることが多い)，ほぼ全国的な分布をみせている。その呼称は，オチャ，オ茶ブルマイ(オ茶フルマイ・茶ブルマイ)，オ茶ゴト(茶事)，嫁ノオ茶ヨビ(嫁ゴ茶・カカ茶)，茶開キ，茶ノミ(オ茶ノミ)，茶入レ，茶ワカシ，お茶をたく(お茶をくむ)と様々である。佐賀県の場合

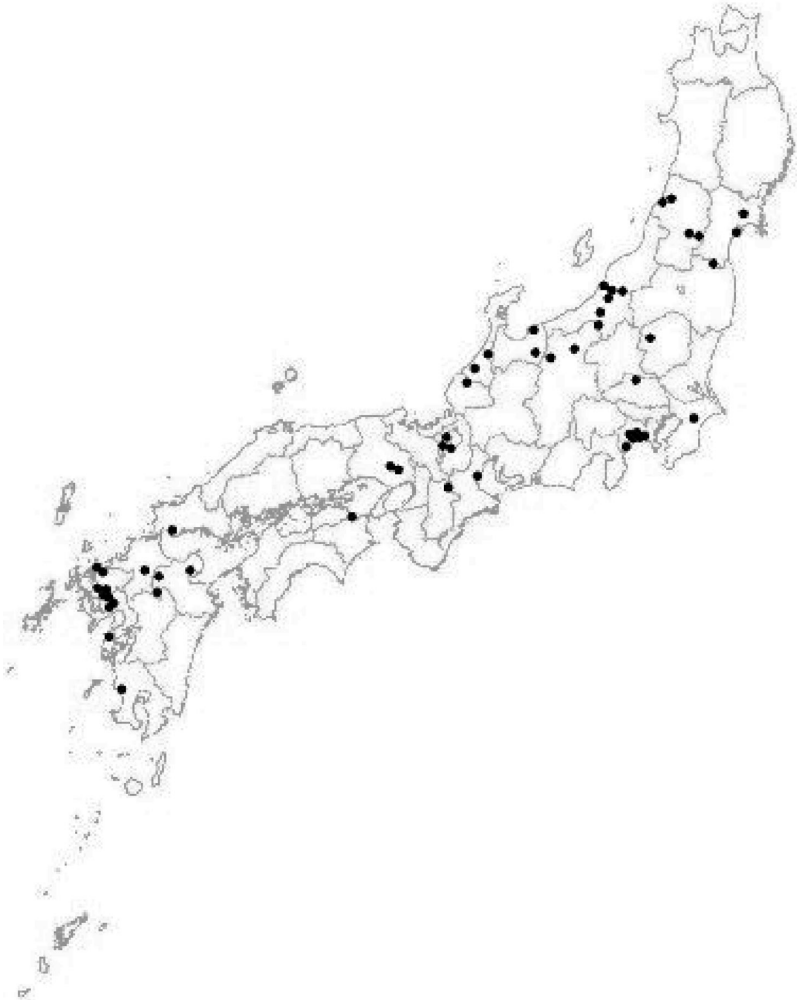


図8 「式後」茶俗の分布

は「チャブレミャア」「茶ブンミャア」と呼んでいるが，鹿島市高津原納富分では「式の翌日は披露宴で，友人・知己を招き，また茶ブンミャアといってコガじゅうの女を招いて祝う。(中略)茶ブンミャアがすんでから婚家の親が嫁をつれ，紙に包んだ茶を持って「世話にならすけん」といって，コガじゅうをあいさつして回る」という。長崎県東彼杵郡波佐見町上波左見では「三日モドリの後，暇を見ては親類へあいさつ回りをする。訪問を受けた親類では予告なしに新夫婦に濃い塩茶をのませる」とあり，大分県速見郡山香町山浦字浦篠のように「祝言の翌日，しゅうとめは嫁をつれて隣近所にあいさつに行き，氏神や寺に参拝する。これを嫁クバリというが，このとき，お茶のなかにこしょうをいれて嫁に飲ませて祝う風習があり，しゅうとめはそのためにたいへん気をつかった」というのも微笑ましい。

「茶配り」の風習も神奈川県や佐賀県で確認される。神奈川県では，嫁迎えの帰りに「茶クバリという7歳ぐらいの女の子」を連れて帰るということもあった[76]。また平塚市土屋惣領分琵琶では「式の翌日，オヨメサンヒロメといって近所の主婦をよぶ。そのあと，ツギメといって，婿方の近い親戚の女の人が嫁を連れて近所を歩く。このとき，嫁はハナジョロッチャといって，茶をふくさとナジョロッチャといって，茶をふくさと呼ばれる紙袋に入れてくばる」とされ，中郡大磯町大磯の場合は「式の翌日には花嫁ノ名ビロメで，仲人が親戚の者の付き添いでイイガミに茶をそえて回る」という。佐賀県は「オ茶クバリ(オ茶クバイ)」と称しており，藤津郡塩田町町区では「式後一週間以内の夜，しゅうとめは嫁を連れ，茶の葉を包みコガじゅうにくばってまわる」とされ，これを「嫁ノ茶クバリ」と言った。

嫁の「ナビロメ」[77]や，里帰りのときにも茶が用いられた。千葉県印旛郡八街町大関の例では「式の翌日午前中に，嫁は仲人や婿の女親とともに宮参りをする。お宮参りからいったん家にもどり，それから女親に連れられて日帰りで里帰りする。実家が遠い場合はその日のうちに帰れないので，仲人の家か親戚の家によって，お茶をごちそうになって帰る」とあり，神

奈川県中魚沼郡津南町上郷宮野原では「式の日から 2，3 日うちにトモドリといって，嫁としゅうとめが嫁の里に泊まりに行く。手みやげに手ぬぐい・茶など持参し，近所にもくばった」という。いずれも贈答の茶俗に属するものである。

⑻ その他の茶俗

以上のように，婚姻という一連の儀礼には，それぞれの段階に多彩な呼称をもった茶俗が確認できるが，以下「その他」として，今少し婚礼茶俗の諸相を追い，次いで，婚礼には属しないものの，「歳祝い」などに特徴的に見られる茶俗事例も紹介しておきたい。

〔婚礼に属するもの〕

見合いに至る過程のなかで，鹿児島県国分郡阿多石では「婿方の仲人が，一回目の相談に嫁側にいったときにしょうちゅうを出されると，相当脈があると考えてよいとされる。二回目をチャノンといい，しょうちゅうを一升と豆腐をお重一箱いれてさげていき，話をすすめる」というが，女性側から断られることを「お茶をひく」と言う地域もある。(78)

婚約期間中，「仲人が花婿を伴って，酒・魚をもって嫁方にあいさつ」に行く「茶ムコ入リ」を行うのは熊本県玉名市三ツ川の例だが，これ以後，花婿は家族同様に出入りをした。また，福岡県宗像郡玄海町鐘崎では，結婚式の前日，両親のそろっている若者 3，4 人がタル酒を女の家にかついで行く風習があり，これを「オチャイナイ(お茶にない)」と称している。甘木市屋永の場合，婚礼の当日，取り交ワシといって嫁方からの荷物と婿方からのお茶を両家の中間で交換して持ち帰る」とされていた。

婚礼のことを祝儀といい，これには「お茶祝儀と本祝儀」とがあり，「お茶祝儀」のときに持って行く品は，ふだん着ぐらいで，(79)「本祝儀をする家はあまりなく，茶祝儀をすることが多かった」ともいう。(80)なかには「婚姻はほんの茶一杯ということですませている」ところもあった。(81)

九州には茶講という隣保組織があることは既に述べたが，この茶講中は

表 8 「その他」茶俗の確認地区一覧

山 形 県	米沢市通町	108歳を茶の字の祝い
福 井 県	南条郡今庄町八飯	88歳のとき女は茶袋をお宮に
岐 阜 県	高山市松之木町	女は茶袋を配る
滋 賀 県	東浅井郡田根村谷口	88歳にチャンブクロを配る
香 川 県	小豆郡土庄町大鐸	婚約辞退を「お茶をひく」
	小豆郡内海町安田	88歳の祝い翌日にオ茶タキの宴
高 知 県	吾川郡伊野町神谷	米寿に女が茶袋配り
	高岡郡東津野村北川	米寿に女が茶袋配り
	幡多郡西土佐村藤ノ川	米寿に女が茶袋配り
	宿毛市沖ノ島町母島	米寿に女が茶袋配り。茶袋は長寿の徴
福 岡 県	京都郡苅田町山口	茶袋を配る
	北九州市小倉区道原	茶袋を贈る
	宗像郡玄海町鐘崎	オチャイナイ（お茶担ない）
	甘木市屋永	お茶を交換
	大川市榎津	オ茶婿入リ
佐 賀 県	三養基郡基山町園部字小松	お茶講
	佐賀市鍋島町蠣久	茶講組
	武雄市武雄町川良	茶講コガ
長 崎 県	上県郡上県町伊奈	オ茶ノミに招く
	壱岐郡芦辺町瀬戸浦	茶祝儀
	壱岐郡勝本町新城字片山触	お茶祝儀
	南松浦郡三井楽町三井楽	オ茶が結婚式
熊 本 県	玉名市三ツ川	茶ムコ入リ
	鹿本郡鹿北町多久小字茂田井	茶袋祝イ
	熊本市松尾町平山	チャブクロを行う
	上益城郡矢部町島木	チャブクロ配り
	菊池郡大津町平川	茶袋88個配り，茶呑ミ
	球磨郡五木村出羽	茶入レ（祝い）
大 分 県	阿蘇郡一の宮町字西手野	茶袋配り
宮 崎 県	日田郡中津江村宮園	茶袋配り
	西諸県郡飯野町大河平	婚姻はほんの茶一杯
鹿児島県	宮崎市広原麗	茶講中
	国分郡阿多石	二回目をチャノン

もちろんのこと，結婚式の準備から後片付けまで，近隣の人々は実によく手伝った。熊本県菊池郡大津町平川では「茶呑ミといって，式の翌日に，近所の娘たちがあと片付けにくる。さらに次の日には部落の人々が招かれる。茶ノミを含めて3日間に及ぶ祝宴の客には，帰りに菓子(たいていらくがん)がくばられる」という。なお，福岡県大川市榎津には「オ茶婿入リ」という風習があり，「婿入リには，結婚とともにするオ茶婿入リや，結婚後3日目にする三ツ目婿入リなどがある。このとき新郎が嫁の家に入り婿入リして家族とあいさつをし酒宴をうける」とされていた。

〔歳祝いなど〕

婚礼に属さない茶俗なかで多いのが米寿などの歳祝いに関するもので，山形県米沢市や岐阜県高山市・小豆郡内海町にも事例が確認できるが，大半は高知県と九州北半域に分布している。

この茶俗の基本的なパターンは，八十八歳の米寿の歳祝いに際して，女性は晒し木綿で「茶袋」を作り，それを近隣・近親に配るというものだが，高知県宿毛市沖ノ島町母島では「88歳の女は全身赤一色の着物で，ずきんをかぶり，たび・じゅばんに至るまで赤色にする。このとき木綿のさらしで小さな茶袋を作って，血縁・知己にくばる。男は着物は普通だが，竹を一尺程度に切り，トカケを作ってくばった。この茶袋・トカケをもらった人は，長寿であるとよろこんだ」という。また長崎県上県郡上県町伊奈の場合は「八十八の祝いには赤ぼうしをかぶせる。トカキ祝イともいい，女竹を節のない所だけ2本1組にして紙を巻き，これをオ茶ノミに招いた客にくばる」とされている。なかには同県菊池郡大津町平川のように88個の茶袋を配るという地域もあり，そのなかに茶を少し入れるということもあったようだ。(82)

香川県小豆郡内海町安田では「男は初老(42歳)・中老(61歳)・ハチボク(88歳)の祝い」をしているが，その「宴は当日に本座をし，翌日にオ茶タキといって，親類・近所の女・子供をよび，翌々日はカメソゴといい，友人を招き3日間通して盛大に祝う」としており，熊本県球磨郡五木村出羽

の場合，「男は41歳，女は33歳が厄入りで，親友や友人などが米や茶を持って来て，茶入レをする」とある。なお米寿や厄年だけではなく，山形県米沢市通町のように「108歳を茶の字の祝い」とするところもあった。

3. 中国と日本の婚礼茶俗に関する同異比較

茶の源郷ともいうべき「中国」と，その喫茶文化の流入先の一つである「日本」との双方には，長い時間をかけて豊かな茶俗が形成され今日に継承されてきた。かといって，そうした茶俗の在りかたは一様でなく，両国ともに相似して存在する事例はもちろんのこと，中国にあって日本に無いもの，逆に日本には存在するが中国では検出できないということも多い。以下では，中国と日本の婚礼茶俗に関する同異を比較検討することにより，それぞれの独自性や，そこから見出すことのできる茶の様々な文化的な役割や社会的機能について考察したい。

婚姻の第一段階ともいうべき「見合い」の場において，飲茶という行為が結婚の合意・不合意のサイン(記号)として用いられるのは中国・日本ともに共通している。しかし，中国の場合は見合いに伴う茶俗事例は少なく，しかも当該する男性自身ではなく仲人を茶でもてなすことで同意を表現する場合が多かったようで，意思表示としては曖昧さが見受けられる。

婚約について，中国では，その成立とそれに伴う贈答を「下茶」「下小茶」などと称することが多く，塩・銀や茶が女性方に贈られ，「留茶」を婚約の証しと理解する地域もあった。婚約に伴う茶俗が取り立てて多いというわけではないが，婚礼全般に茶が贈答品として盛んに用いられるのは中国の一つの特徴である。

日本の場合，婚約および結納の儀に茶が用いられる習俗は比較的多く，こと婚約に伴う茶俗は大半が九州に分布しているという地域的特徴を見出すことができる。またその言葉も多彩で，「オ茶ノミ」「オチャゲ」「茶入レ」などがみられ，「固メノ茶入」「釘茶」のように，名称自体が約束事の

意味をそのまま表現している例も見受けられる。婚約の茶俗についても，中国より日本のほうが多彩であり，その意味するところも明瞭であると言える。

結納にもしばしば茶が用いられ，中国では結納品を女方の家に送ることを「下茶」「下大茶」，あるいは「行茶」「送茶」「過茶」などと称するところも多い。この点では日本も同様で，「祝イノ茶」と称して結納品のなかに茶が含まれることが多く，結納を「茶祝儀」，仲人が酒・茶・布地などを嫁方に持参して約束固めをすることを「茶スマシ(チャズマシ)」などとも言っている。興味深いのは，佐賀県に特徴的な「オ茶開キ」で，この場合の「オ茶」は結納の品を意味し，「開キ」というのはそれを披露することをいうが，婿方から嫁方へ品物を贈るに際して「オ茶ニナイ(荷い)」が同行するということもあった。なお，日本の場合，この結納茶俗は新潟県と九州，とりわけ福岡県と佐賀県に集中的に分布していることが注目される。やはり，大陸的影響と考えるべきだろうか。

日本に比べて盛大に行われるのが中国の「親迎」にともなう茶俗で，日本で言う嫁迎えに来た新郎に「献茶」や「茶湯」が振舞われ，茶を勧められた新郎は返礼の贈物をする。回族の「親迎」もほぼ同様，この民族の場合はミルク茶を用いることが多い。日本でも嫁迎えの習俗があり，やはり茶が大いに用いられているが，その大半は茶の贈答に関する茶俗で，持参する茶のことを「祝イノ茶」とか「茶ダラ」「チャラグ」，その荷物を背負って行く者を「茶持チ」とか「茶袋(女)」と呼んでいる。日本の場合，この嫁迎え(中国では「親迎」)に続いて，嫁の出立ちに際する「別れの茶会」や「近所ノオ茶ヨビ」，あるいは嫁が出立した後に近親・縁者で祝う「茶ゴト」あるいは「茶ブルマイ」を行うところもある。なお，村落共同体や通婚圏の違いによるものだろうが，嫁の婚家入りに先立って行われる日本の茶俗として興味深いのが中宿での飲茶で，一休みした花嫁の一行は，ここで茶を飲んでから婚家に入った。

婚家に入った新婦が，新郎の舅姑らに挨拶し，祖霊や祖廟を拝して茶を

献じる「拝茶」は中国各地にみられるが，日本でも同様の慣習が関東から東北南部にかけて広く分布しており，「オチツキ茶」などと称している。そのあとに三三九度の盃事となるのだが，披露宴に入るに際して「一茶席」が設けられるということもあった。「稚児の茶出し」が行われるというのも微笑ましい。

披露宴でも，茶が頻出する。中国では，この宴席に到る茶を「三献茶」，賓客の代表と新郎新婦が膝を交えて茶を飲む「圓茶」，婚儀を終えた新郎新婦が飲む「交杯茶」など，その様態は様々だが，日本でも披露宴に関わる茶俗の事例は多く見受けられ，とくに関東地方と九州地方の全域に分布している。披露宴を「お茶事の式」と称し，「オ茶ノミ」という娘組の酒宴が行われる地域も存在するが，この宴席で新婦が茶を振舞うことを「オ茶クミ」といい，その茶を「オ嫁サンノオ茶」などと呼びことも多い。

なお，『中国地方志』から検出できなかったが，日本では，この披露宴がたけなわを過ぎるころに新婦が茶を注いでまわることを「イケチャ(行け茶)」「イネ茶」などといい，これが宴終了の「合図」と理解されているという側面は注目に値する。「イケチャ(行け茶)」「イネ茶」などを，日本独自の文化と見ることの確定はできないが，今のところ，こうした事例を茶文化の源郷ともいうべき中国から見出せていない。日本には存在するが中国では検出できない典型例といえよう。これとは逆に，宴会が終わった後の「擺茶」や，新婚の夜の「食新娘茶」・「喫新人茶」などの楽しみ方は，日本ではあまり見受けない慣習である。

婚礼全般にわたって，接待や贈答の茶俗は多く検出できるが，婚後においても，そうした儀礼は中国・日本とも盛んに行われた。中国では接待に関するものを「三座茶」・「三座点」「待茶飯」「泡糖茶」「点茶盤」「洗頭茶」，贈答は「点茶」「開門茶」「送茶」「散茶」「傳茶」「出茶」，贈物を「圧茶銭」，式当日の「進門茶」に始まり「年茶」に至る節目ごとの茶俗を「三朝茶」「七朝茶」「十四朝茶」「満月茶」「節茶」などと称している。同様に日本でも式後の茶俗は多くの事例が検出でき，その呼称は実に多様

で，ほぼ全国的な分布をみせている。仮に，中国では見当たらないものを求めるなら，それは「茶配り」の風習ということになろうか。嫁迎えの帰りに，わざわざ「茶クバリという7歳ぐらいの女の子」を連れて帰るというのも面白い。

もう一つ，婚礼には属さないが，中国ではあまり行われない茶俗として挙げられるのが，米寿などの歳祝いに関するもので，一般的には八十八歳の米寿の歳祝いに際して，女性が晒し木綿などで「茶袋」を作り，それを近隣・近親に配るというものである。ほかに厄入り(男は41歳，女は33歳)に友人達が米や茶を持って来て「茶入レ」をするということもあり，108歳を「茶の字の祝い」とするところもある。

4. 茶と文化コミュニケーション

婚姻が祝事たるゆえ，その儀礼諸段階で茶を含めた様々な贈答があり，一方で，茶接待などの饗応や振舞いが盛んに行われることは当然のことと言える。とりわけ中国の茶俗には，贈答に関する事例の多さが目立つが，日本の場合，こうした側面に加えて，見合い時の飲茶に始まり婚約から結納へ，そして式当日の嫁迎え・出立ち・中宿，婚家入り・盃事から披露宴といった一連の過程のなかで，地域によって名称は異なるものの，実に多様な茶俗の存在と多彩な名称を確認することができ，それぞれに一定の意味を担っていることがわかる。まず，表9を見ていただきたい。

婚姻儀礼の第一段階ともいうべき「見合い」というのは，仲介者(仲人)が男女を引き合わせ，互いの容貌や性格などをみさせることで，家父長権の強弱や近在・遠方など，時代や地域によってその必要度は異なるが，婚姻を前提とする男女交際に向けた意思の有無が同席で示されるのが一般的である。その場合，こうした慣行のなかにあって，仲人を介しての見合いの席で出される茶を「見合い茶」と称し，この茶を飲むか飲まないかで縁談の成立を判断するという地域は多い。

表9　婚礼諸段階における茶俗名称

〈式　前〉

見合い	婚　約	結　納
見合い茶	オ茶 オ茶ノミ オ茶入レ オチャゲ 固メノ茶入 釘茶 茶モドシ 茶祝儀	茶スマシ オ茶 祝イノ茶 茶祝儀 茶入レ オ茶開キ チャブンミャア チャラグ

〈式当日〉

嫁迎え	出立ち	中　宿	婚家入り	盃　事	披露宴	宴終了	宴　後
祝イノ茶 茶袋 茶持チ 茶ダラ チャラグ	別レノ茶会 オ茶ヨビ 茶ゴト 茶ブルマイ	(飲茶)	オチツキ茶	一茶席	オ茶ノミ お茶事の式 茶くみの着物 オ嫁サンノオ茶 ヨメノチャ オ茶クミ 嫁ジョノ茶 村茶屋 ヒロメのチャビ	嫁ゴノオ茶 嫁ノ茶 ワカレノ茶 イケッ茶 イケチャ イネ茶	オ茶ブルマイ 茶開キ オ茶接待 オ茶ゴト 嫁ノオ茶ヨビ ナビロメの茶 チャノミ 茶入レ 茶ワカシ

〈式　後〉

翌　日	二日以降	里帰り
カカ茶 ハナジョロッチャ オ茶クバリ 茶ブンミャア 嫁ゴ茶を汲む	茶接待	土産茶

婚約の成立や確定をそのまま意味する「オ茶入レ」や「固メノ茶入」・「釘茶」，結納時の「祝イノ茶」や「オ茶開キ」，あるいは式当日の嫁迎え・出立ち・中宿などにも茶はしばしば贈答品や饗応に用いられているが，興味深いのが婚家入りにともなう「オチツキ茶」である。

嫁が婿家に入る際に行われる様々な儀礼に，火や水，笠や鍋・茶碗，草履や足洗桶など様々なモノが登場するが，これらを用いての入家儀礼は，

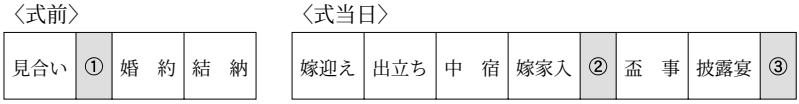
嫁の生家と婿家の絆を確認したり嫁が早く婚家に定着することを願う意味がある一方で，嫁の所属が生家から婚家へと変わることによって生じる諸矛盾や危険を回避するための祓えや浄化といった呪術的な要素もあると考えられており，「生まれかわる」という，いわば境界を越える際の象徴的な儀礼でもあった。

こうした一連の流れのなかにあって，嫁に出される食物としてよく知られているのが「オチツキ餅」で，嫁がこれ(他に落ち着き雑煮，吸い物など)を食べなければ三三九度の盃事へと進まない。この餅や雑煮・吸い物などに代わって登場するのが「オチツキ茶」である。入嫁時に新婦を家の中に迎え入れた新郎の両親が「オチツキ茶」を出し，新婦は茶を飲んだ後に仏壇に手を合わせて先祖に挨拶，ついで三三九度の盃事に入るというのが一般的だが，茶を飲んだ花嫁は，まるでその行為に促されるようにして盃事に入る。

盃事を済ませ，新に家の成員となった嫁を披露する宴でも，茶は饗応のものとしてしばしば振舞われるが，この披露宴の茶で注目されるのが「イネ茶」とか「イケチャ(イケッ茶)」「ワカレノ茶」と称される茶俗である。宴もたけなわを過ぎると，新婦は来賓各人に謝意を述べて茶を注いで回るが，ここで振舞われる一杯の茶は宴の終了を示唆している。挨拶や締めの言葉がなくとも，その場に寄り集った人々全員が経験を通じてその意味を共通理解しており，宴終了の「合図」であるこの茶を飲んだ来賓は，暗黙の了解のもとで散会していくのである。

なお，式後の近隣主婦を招いての謝意をこめた茶接待や茶配りも，新な人間関係を形成し円滑に運ぶための手段のひとつにほかならない。

婚姻そのものが，親族集団間における女性(あるいは男性)を媒介としたコミュニケーションに他ならないが，その儀礼過程における特定の空間や時間での非言語的な行為や動作・しぐさが，重要な役割を果たしていることは多い。ましてや，狭い生活環境(コミュニティ)の中で生活していた近代以前ともなれば，人々は様々な習慣などに規制されており，それだけに



①見合い茶　②オチツキ茶　③イネ茶

図9　茶と文化コミュニケーション

そうしたコミュニケーションの成立は容易であったといえよう。

コミュニケーションの手段は，言語・非言語に大別され，非言語的コミュニケーションは，しぐさや身振り・表情あるいは特定の行為や行動などの身体的記号を用いるものからモノによるもの，さらには音楽，図像などの複雑な象徴の結合を含むものまで多様であり，またさまざまな段階に分類することもできる。

婚姻儀礼における結納茶や披露宴での茶の接待，あるいは式後の「茶配り」なども，饗応・贈与・交換という社会的に共有されているコミュニケーション手段であることはいうまでもないが，そうした婚礼諸段階で注目されるのが，各儀礼の節目に位置し次段階への移行を促す「見合い茶」・「オチツキ茶」・「イネ茶」といった茶俗である。

結婚の合意・不合意に関わる「見合い茶」は，この飲茶という記号的行為が，言語を発せずとも相手に意思を伝達するという役割を明瞭に果たしている。一方，婚家入りした嫁に出される「オチツキ茶」は，盃事という次の段階へ移行するうえで必要な行為であった。とりわけ，宴の終了を意味する「イネ茶」というのは，まさしく茶というものが発揮する文化的な非言語コミュニケーション機能を雄弁に物語る事例といえよう。人々は言葉を発しなくとも，これらの身体的行動の軌跡を視覚的に読み取ることでコミュニケートし合っており，筋書きを共有し合った婚礼という儀礼のなかで関与者同士が同時に了解し合っている事柄であった。なお，見合いの行われる部屋や新婦を迎え入れる仏間，披露宴が行われる座敷というのは，この場合，その身体的表出を媒介とした思考や意思の伝達が解読される場（コンテキスト）であるといえよう。

むすびにかえて

かつて，「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」と題する拙稿[(1)]で，この儀礼に登場する茶の在り方から，「茶」というものが本源的に持つ境界性やキヨメ機能というものを明らかにしたが，本稿が扱った婚礼茶俗からも同様，茶の文化コミュニケーションとしての新しい解釈を提起することができる。もちろん，茶会や茶席における様々な作法や寄り合った人々交歓，あるいはそれにともなう多彩な饗応が，喫茶や茶の贈答という行為を介したコミュニケーションそのものに他ならないが，こと婚姻儀礼における茶俗で注目されるのが，見合い茶・オチツキ茶・イケ茶が無文字・暗黙の了解で共有されている媒体としての側面，言い換えれば茶というものがもつ文化コミュニケーション機能であった。それは，茶道やその歴史文化研究からは見えてこない茶の重要な機能であり，茶俗研究から初めて導き出すことのできた，茶の湯とは異なるもう一つの茶文化世界に属するものである。

なお，筆者が手がけている「ライフサイクルにおける茶の習俗(茶俗)研究」のうち，人生の通過儀礼に属するものについては，産育・葬送に続く本稿の「婚姻儀礼」をもって一区切りをつけたい。次ぎに課題として残っているのが「歳時」に関わるもので，引き続き正月・盆月における茶俗研究に入っていきたい。

注

（1）『人間文化研究』第 1・2・4・5・6 号(「中国茶俗ノート」（Ⅰ）～(Ⅳ)，1999年11月～2001年 7 月)。『中国地方志民俗資料匯編』全 6 巻(中南・西南・華東・華北・東北・西北巻の計 9 冊。北京図書館出版社刊)については「中国茶俗ノート」（Ⅰ）および拙稿「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」(『比較日本文化研究』第 8 号，2004年11月，比較日本文化研究会)の註(35)を参照されたい。

（2） 文化庁編『日本民俗地図』〈解説・資料〉については拙稿「日中茶俗の比

較社会史研究にむけて」(財団法人三徳庵茶道文化学術助成研究「平成十三年度研究報告書」)および前掲「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」の注(35)を参照。

(3) 市町村史類の民俗編のほか,『日本庶民生活史料集成』(三一書房)や『日本民俗誌大系』(角川書店)などからも多くの茶俗事例を検出することができるが,これらをひとまとめにする作業は未だ途上である。

(4) 中世の茶俗事例については,現在,14世紀中頃までの史料を確認できているが,これについても未だ作業の途中で,拙稿「中・近世の史料にみる茶俗研究試論」(財団法人三徳庵茶道文化学術助成研究「平成十四年度研究報告書」)を参照されたい。

(5) 前掲註などと重複するが,ここで筆者の茶俗に関する研究の既稿を一覧しておきたい。

- 「総合的な茶文化史研究を求めて」(『京都文化短期大学紀要』第31・32合併号,平成12年3月)
- 「中国茶俗ノート」(Ⅰ)～(Ⅳ)(『人間文化研究』第1・2・4・5・6号,1999年11月～2001年7月)
- 「THE HISTORY OF TEA CULTURE AND CUSTOMS IN JAPAN」(『韓国茶学会誌』第6巻第2号,2000年4月,韓国茶学会)
- 「日中茶俗の比較社会史研究にむけて」(財団法人三徳庵茶道文化学術助成研究「平成十三年度研究報告書」)
- 「中・近世の史料にみる茶俗研究試論」(財団法人三徳庵茶道文化学術助成研究「平成十四年度研究報告書」)
- 「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」(『比較日本文化研究』第8号,2004年11月,比較日本文化研究会)
- 「茶湯(チャトウ)にみる,もう一つの茶文化研究」(『京都学園大学総合研究所報』第6号,2005年3月)。

(6) 前掲注(1)参照。

(7) 茶そのもの,あるいは飲茶(喫茶)という行為が持つキヨメ機能や境界性については,既に拙稿「一服一銭と門前の茶屋」(『中世地域社会の歴史像』所収,阿吽社,1997年5月刊)で論じたことがある。

(8) 「中国茶俗ノート」(Ⅰ)～(Ⅳ)。前掲注(1)参照。

(9) 以下の典拠は,すべて「中国茶俗ノート」(Ⅰ)～(Ⅳ)として掲出した『中国地方志』の資料に拠る。当該の県志類には,それぞれの作成時期が明記されており,その茶俗が何時頃のものであったかを知ることができるが,ここでは県志名などを註として示すにとどめた。詳細は「中国茶俗ノート」を参照されたい。

(10) 遼寧省『奉天通志』・吉林省通化地区『通化県志』ほか

(11) 北京市『順天府志』・貴州省『息烽県志』・江西省『上猶県志』ほか
(12) 西蔵自治区『西蔵新志』ほか
(13) 新疆維吾爾自治区『新疆概観』・黒龍江省綏化地区『綏化県志』ほか
(14) 青海省海東地区『循化志』
(15) 浙江省『鎮海県志』・湖南省『醴陵県志』・四川省『渠県志』ほか
(16) 台湾省『彰化県志』
(17) 福建省『藤山県志』
(18) 広東省『鶴山県志』
(19) 浙江省『衢県志』
(20) 浙江省『余姚六倉志』
(21) 四川省『新繁県志』
(22) 湖南省『嘉禾県図志』
(23) 四川省『重修酆都県志』・『彭山県志』
(24) 湖南省『善化県志』
(25) 台湾省『彰化県志』
(26) 江西省『万安県志』
(27) 湖南省『永州府志』
(28) 上海市『月浦志』
(29) 江蘇省『六合県志』
(30) 浙江省『鎮海県志』
(31) 江西省『宜黄県志』
(32) 浙江省『余姚六倉志』
(33) 湖北省『長楽県志』
(34) 広東省『羅定県志』・広西壮族自治区『信都県志』
(35) 四川省『新繁県志』
(36) 広東省『清遠県志』
(37) 浙江省『開化県志』
(38) 湖北省『長陽県志』
(39) 『日本民俗地図』によるかぎり，北海道には婚礼茶俗が確認されず，また沖縄県には石川市石川で結納および嫁迎えに際して「チャラグ」と称する「お茶受け」品持参の記載があった。茶そのものが含まれるかどうかは判然としないが，いちおう事例の一つと考えておきたい。なお，図の作成にあたっては，日本全図を掲示すると記号や都道府県界が読みとれなくなるため，北海道の全域と沖縄県は割愛した。

また，『日本民俗地図』に婚礼茶俗の記載が見られなかった都道府県は，北海道・青森県・京都府・和歌山県・兵庫県・鳥取県・徳島県・愛媛県だが，もちろん，これらの地域に当該する茶俗が存在しなかったというわけではな

い(前掲注(１)「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」の注(36)参照)。

(40) 以下,『日本民俗地図』に依拠して茶俗事例を検証するが, 本文でその茶俗が確認される地名を記さない場合は, 註でそれを明記しておいた。掲出の表を参照されたい。

(41) 新潟県南蒲原郡下田村大谷地, 熊本県阿蘇郡小国町西里字岳ノ湯, 長崎県南松浦郡三井楽町三井楽, 鹿児島県肝属郡東串良町

(42) 香川県仲多度郡多度津町高見島

(43) 福島県西白河郡矢吹町三城目, 福島県西白河郡表郷村金山, 熊本県球磨郡五木村出羽, 宮崎県宮崎郡佐土原町下田島字大炊田

(44) 鹿児島県出水郡野田村熊陳

(45) 群馬県吾妻郡中之条町蟻川

(46) 福岡県豊前市合川, 福岡県北九州市小倉区道原, 鹿児島県出水市丸塚, 鹿児島県川辺郡笠沙町姥

(47) 見附市杉沢町, 栃尾市山葵谷

(48) 三島郡出雲崎町尼瀬, 三島郡越路町不動沢

(49) 東頸城郡松之山町天水越, 中頸城郡柿崎町上下浜

(50) 福岡県三猪郡大木町笹淵, 福岡県大川市榎津, 佐賀県佐賀郡富士村麻那古

(51) 大分県下毛郡邪馬渓村宮園

(52) 熊本県葦北郡葦北町大野

(53) 熊本県球磨郡須恵村字川瀬, 熊本県飽託郡天明村銭塘

(54) 福岡県粕屋郡新宮町相ノ島

(55) 静岡県田方郡土肥町小下田, 長崎県南松浦郡新魚目町榎津

(56) 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹

(57) 新潟県十日町市鉢

(58) 埼玉県児玉郡神川村渡瀬, 山梨県甲府市黒平町

(59) 千葉県印旛郡八街町大関, 神奈川県平塚市土屋惣領分琵琶, 長野県下伊那郡南信濃村八重河内字梶谷

(60) 愛知県犬山市栗栖

(61) 秋田県秋田市大平字黒沢

(62) 福岡県筑後市溝口

(63) 他に福岡県三猪郡大木町笹淵の例

(64) 東京都北多摩郡村山町中藤字入

(65) 埼玉県比企郡小川町腰越字小貝戸

(66) 群馬県新田郡新田町

(67) 青梅市新町

(68) 青梅市日影和田

(69) 同都八王子市上恩方町上案下, 同都北多摩郡狛江町小足立, 宮崎県宮崎市

広原麗

（70） 宮崎県西臼杵郡高千穂町字五ヶ所，宮崎県東臼杵郡西郷村田代，鹿児島県出水郡野田村熊陳

（71） 諫早市有喜町，諫早市小野島町

（72） 高座郡海老名町上今泉

（73） 同県入間郡越生町小杉，秩父郡大滝村字滝之沢，大里郡花園村黒田

（74） 山梨県大月市上真木町，岐阜県瑞浪市大湫，愛知県北設楽郡稲武町夏焼

（75） 日田市小野，直入郡久住町白丹

（76） 神奈川県足柄下郡真鶴町真鶴

（77） 神奈川県茅ヶ崎市高田

（78） 香川県小豆郡土庄町大鐸

（79） 長崎県壱岐郡勝本町新城字片山触

（80） 長崎県壱岐郡芦辺町瀬戸浦

（81） 宮崎県西諸県郡飯野町大河平

（82） 阿蘇郡一の宮町字西手野